

contents

妊孕性と学校教育……………1	今月のブックガイド……………13
もっと知りたい男子の性⑭……………10	故・島崎継雄氏を偲ぶ……………14
Dr.上村茂仁の性の悩みクリニック④……………12	JASEインフォメーション……………19

妊孕性と学校教育

熊本大学教育学部・大学院教育学研究科准教授 秋月百合

晩産化と不妊症患者の高齢化

2013 年、日本女性の平均初婚年齢は 29.3 歳、第 1 子出産年齢の平均は 30.4 歳であり、いずれも上昇傾向を示している。35 歳以上で第 1 子を出産した割合は、1970 年に約 2% であったのに対し、2012 年には 19% まで上昇している。

一方、不妊カップル数は、1999 年の 28 万組から 2003 年の 46 万組へと増加しており(厚生労働省推計)、2013 年の日本産科婦人科学会のデータでは、体外受精や顕微授精等の高度生殖医療技術(ART: Assisted Reproductive Technology)を受ける患者数は、39～40 歳にピークを示し、40 歳前後に極めて多い(次ページ図表 1)。日本女性全体および不妊症患者のいずれにおいても、高齢で妊娠出産を望む女性が増加しているといえる。

加齢と妊孕性^{にんようせい}の変化

2012 年 2 月に放送された NHK クローズアップ現代「卵子老化の衝撃」を機に、「卵子の老化」という言葉が社会に浸透し、女性は歳を重ねるとともに妊娠

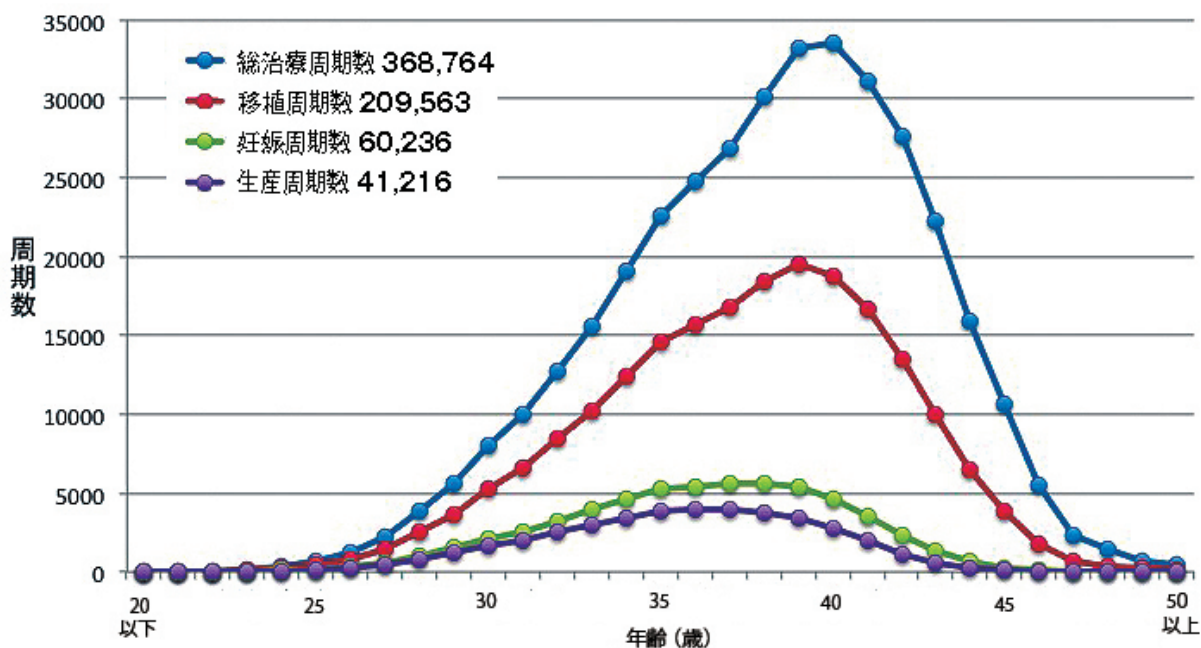
しにくくなることが世間一般に知られるようになった。図表 2(次ページ)は、日本産科婦人科学会の 2013 年のデータであるが、ART を受ける不妊女性患者の妊娠率は、30 歳を過ぎると緩やかな低下が始まり、37 歳前後からそのスピードが増しているのがわかる。

なぜ女性の妊孕性(妊娠する能力、妊孕力)は加齢とともに低下するのか。それは胎児期から持つ原始卵胞が加齢とともに量的および質的に低下していくことが影響している。原始卵胞は、胎児期に約 700 万個作られ、出生時には 200 万個、初経発来頃には約 30 万個と漸減し、閉経前には限りなく減少する。

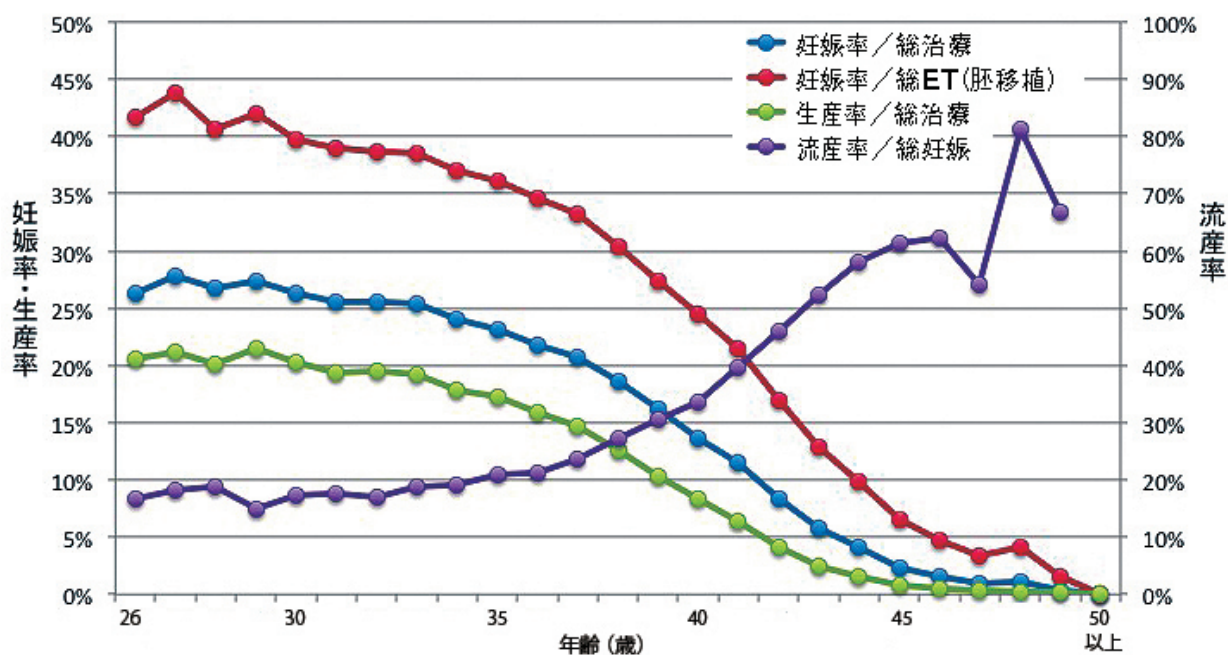
日本生殖医学会によると、卵子の質的な低下の詳細なメカニズムは不明であるが、減数分裂時に生じる異常やミトコンドリアの機能低下が関連していると考えられている。人の身体が歳を重ねるとともに衰えていくのと同じように、卵子の質も加齢とともに低下していくのである。図表 2 から、ART 患者では加齢とともに妊娠率が低下し、逆に流産率が高まっており、加齢に伴う染色体異常の増加が読み取れる。

昨今、「美魔女」ということばが流行しコンテスト

図表1 日本産科婦人科学会 ART 治療周期数 2013



図表2 日本産科婦人科学会 ART 妊娠率・流産率 2013



まで催されているが、どんなに外見が実年齢より若く美しく見えても、40歳女性の卵子は同じく40歳なのである。美容整形を利用すれば外見は若返ることができるが、卵子はそうはいかないのである。

年齢が若ければ必ず妊娠するのか

生殖医療技術を駆使すれば別であるが、基本的には

性交しなければ妊娠することはない。性交したからといって必ずしも妊娠に至るわけではなく、頻回な性交が鍵となる。加えて、以下の要件が満たされることが重要である。

- 射精できる (射精障害がない)
- 性交できる (性交障害がない)
- 排卵がある (卵巣機能の異常がない)

- ・精液の中に十分な量および質の精子がいる（造精機能障害がない）
- ・受精卵の通り道に異常がない（女性の生殖器に器質的異常がない）
- ・排卵時、卵子の近くに多くの精子が存在している（排卵と性交のタイミングが合致している）

加えて、日常生活習慣に関連する喫煙や不適正体重（痩せ、肥満）、性感染症（STD；Sexual Transmitted Disease）が妊孕性のリスク因子であることを知っている必要がある。とりわけSTDに関しては、コンドームを使用せず性交すると妊娠してしまうと思われがちだが、別の見方をすると、コンドームを使用せずに性交した結果STDに罹患し、卵管炎やPID（骨盤内炎症性疾患）を起し妊娠しにくくなる可能性があるのだ。「コンドームの非使用＝妊娠の可能性」だけでなく、「コンドームの非使用＝妊娠しにくくなる可能性」も知っておく必要がある。

妊孕性に関する認知度

大学の授業において、学生に「将来子どもが欲しいか」と尋ねると、約9割は「欲しい」と答え、残りの1割は「わからない」もしくは「欲しくない」と答える印象がある。国内外の調査をみても、約85～95%の大学生が将来子どもを持ちたいという意思を抱いているようだ。

将来子どもが欲しい若者は、妊娠や出産、妊孕性に関する正しい知識を持っている必要があるが、日本の若者はこうした知識をどの程度持っているのだろうか。月経がある限り妊娠できると認識している高校生が半数以上存在するとの報告、40代女性の妊娠確率は30代女性と変わらないと認識している大学生は35%であり、STDが妊孕性の低下に影響することを知っている大学生は半数に満たない等の報告がある。

また、将来妊娠を希望する34歳以下の未婚女性の約7割が、女性の妊孕力の低下が始まるのは40歳を過ぎてからと回答した報告もあり、若い人々が妊娠するために必要な正しい知識を十分に持っているとは言いがたい。さらに、Buntingらが行った研究（参考文献参照）では、妊娠を望んでいる日本人カップルのうち、妊孕性に関する十分な知識を持っている割合はおよそ36%で、経済開発指数がvery highに該当する14カ国中最下位という結果が報告されており、国際的にみても

日本人の妊孕性に関する知識は高くないことがわかる。

不妊症患者さんの思い

不妊女性は、子どもを授けられないこと、不妊治療を受けることにより、様々な悩みやストレスを経験しており、精神的健康が悪影響を受けている。とくに長年治療を継続している女性、高齢にして不妊治療を受ける女性は、いつ治療を終結するかの決断に悩み、ゴールが読めない治療主体の生活を送らねばならず、女性個人としてだけでなくカップルとしての人生の自己実現が果たされない状況に置かれている。

我々が過去に行った調査では、約半数の不妊女性が、「結婚したらすぐに子どもを授かると思っていました」、「卵子が歳をとるなんて誰も教えてくれなかった」と述べている。「若い時から不妊の知識を持っていれば、もっと早く子どもをつくろうとしたかもしれない」、「妊娠と年齢の関係を知っていればよかった」等のように、妊孕性に関する知識を持っていなかったことに対する後悔の念がうかがえる。これらの知識を学校で教えてほしいと望む女性は7割を超えており、不妊や妊孕性に関する知識を学校教育に取り入れて欲しいという切実な思いがうかがえる。

妊孕性に関する知識を学校教育へ組み込む可能性

若い人々が将来、望むときに妊娠出産し、家族形成という自己実現を果たすことができるよう、知らなかったことで後悔することがないように身に着けておきたい知識、態度、行動は以下の通りである。

1. 妊娠や出産に関する知識、妊孕性に関する知識を得る。
2. 将来をイメージでき、自己の意思に応じた行動がとれる（性と生殖のセルフケア）。
3. 生殖は個人のみの課題ではなく、パートナー間の課題であるため、男女の性と生殖の特性について互いに理解し、意思を尊重し、話し合い、協力する姿勢を持つ。

これらを身に付けるには、家庭、学校、地域での教育が不可欠である。ここでは、「1. 妊娠や出産に関する知識、妊孕性に関する知識を得る」に焦点を当て、学校における教育の可能性について以下に述べていく。

平成 11 年に文部省より出された「学校における性教育の考え方、進め方」によると、性教育の今日的意義と必要性は、リプロダクティブヘルスライツの概念を受けて、「学校はすべての児童生徒に対して、人間尊重、男女平等の精神の徹底を図るとともに、人間の性に関する基礎的・基本的事項を正しく理解させ、同性や異性との人間関係や現在および将来の生活において直面する性に関する諸問題に対して、適切な意思決定や行動選択ができるよう性教育を充実する必要がある」と書かれている。

現在直面する性の課題のみならず、将来直面するかもしれない性の課題に適切に対応できるよう実施されなければならないことがわかる。妊孕性の問題は、後者の将来直面するかもしれない課題に含まれる。

性教育は、保健等の教科、道徳、特別活動などを通して、それぞれのねらいや特質に性教育としてのねらいを加え、発展的に学校教育全体で取り組むものとされている。では、妊孕性に関する知識提供をいつどこで行うことが可能であるか。

小・中・高校の学習指導要領をみると、人の生殖全般が関連すると思われる指導内容として、小学校保健（第 3・4 学年）「(2) 体の発育・発達についての理解（イ 第二性徴、初経、精通）」、中学校保健「(1) 心身の機能の発達と心の健康（イ 生殖にかかわる機能の成熟）」、中学校理科「(5) 生命の連続性（ア 生物の成長と殖え方）」、高校保健「(2) 生涯を通じる健康（ア—（ア）思春期と健康、（イ）結婚生活と健康）」等があげられる。

一方、日常生活習慣、感染症、加齢に関連する単位として、小学校保健（第 5・6 学年）「(3) 病気の予防の理解（エ 喫煙、飲酒、薬物乱用などの健康への影響）」、中学校保健「(4) 健康な生活と疾病の予防（ウ 喫煙、飲酒、薬物乱用と健康、エ 感染症の予防）」、高校保健「(1) 現代社会と健康（イ—（イ）喫煙、飲酒と健康、（エ）感染症とその予防）」、「(2) 生涯を通じる健康（ア—（ウ）加齢と健康）」等がある。

これらの単位の中で、妊孕性に関する情報を科学的知識として組み込んでいくことが可能であろう。組み入れたい内容は次の通りである。

- 初経があれば、閉経がある。
- 男性は毎日精子を作る機能があり、女性は新たに卵子（原始卵胞）を作る機能はない。

- 卵子の数は年々減少する。
- 卵子数の減少、卵子の質の低下により、女性は加齢とともに妊孕性が低下していく（男性も年齢とともに徐々に造精機能が低下するが、個人差がある）。
- 排卵頻度はおおよそ月に 1 回であり、卵子の寿命は 24 時間である。一方、精子の寿命は 2 - 3 日である。つまり妊娠のチャンスは約 1 か月に 1 回（24 時間）である。
- 月経や射精は、将来新しい生命を作り出すために必要不可欠な現象である。
- 将来妊娠・出産するためには、適切な日常生活習慣を送ることが大切である（特に非喫煙、適正体重の維持）。
- STD は不妊症の原因となる可能性がある。

また、教育を行う上で気を付けたいことは、以下の通りである。

- 発達段階を考慮に入れる（理解力、論理的思考力等）。
- 他の教科等、既習内容との関連性を考慮する。
- 不安を煽らない。
- 性交＝妊娠という印象を与えない。
- 性交に対するネガティブな印象を与えない。
- 子どもたちの現在および将来の健康維持を担っているという意識をもち、将来を見据えた上で教育を行う。

これらを踏まえ、熊本県性教育研究会では、平成 26 年 12 月より、妊孕性の知識を組み込んだ性教育の授業実践の可能性を検討してきた。中学校 1 年生を対象とした授業開発を試み、平成 27 年度 1 学期に、宇土市立鶴城中学校で実践を行ったのでここに紹介する。なお、詳細は熊本大学実践教育研究第 33 号に掲載されているので、そちらを参照願いたい。また、本実践は第 45 回全国性教育研究大会（2015 年度熊本開催）において報告した。

妊孕性の知識を取り入れた中学校 1 年生向け性教育の授業開発の試み

（熊本県性教育研究会 秋月百合、大橋勇一、太田隈美幸、今坂洋志）

授業の構築と実践

1. 授業対象者と実施日

本取り組みに理解と協力の意思を示していただいた宇土市立鶴城中学校に在籍する 1 年生 36 名（1 クラ

ス)を対象として計画した。第1回を2015年6月30日5限、第2回を7月3日6限、第3回を7月7日5限に実施した。

2. 授業案作成のための事前アンケート (n=36)

授業案の作成に先立って、対象となる生徒にアンケートを実施した。彼らは小学校4年生の保健学習で「月経・射精」について学習しているが、事前アンケートの結果では、月経について「知っている」と答えた女子は20人中8人であり、男子は16人中14人が「知らない」と答えた。また、射精についても男女各2人が「知っている」と答えたにすぎなかった。卵子の老化(本アンケートの設問では平易さを求めてやむなくこの言葉を使用した)について「知っている」と答えた生徒は皆無であった。

鶴城中学校では、既に性教育の年間計画が立案されており、計画にある単元のうち、「月経・射精」及び「生命誕生」が妊孕性に関する内容を組み込むうえで適切であると判断した。「月経・射精」及び「生命誕生」は、「二次性徴」に続いて実施される計画であった。本来であれば「二次性徴」と「月経・射精」は2学期の保健体育で扱うが、今回の取り組みは1学期で実施する計画であったため、保健体育の内容も含めて指導することとした。第1時「二次性徴」、第2時「月経・射精」、第3時「生命誕生」をテーマとして、それぞれ50分で実施した。

3. 授業の内容

第2時の「月経・射精」について、これまでの実践では現段階で起こりつつある身体の変化をどう受けとめ、どう乗りきるかに指導の重点を置いてきた。それに対し今回は、思春期の今を起点としながら、人間の一生を通じて月経や射精の様子がどのように変化していくかを概観するところに重心を移した。まず、「初経」と対峙させて「閉経」についても取り上げた。また、原始卵胞数の経年変化について指導内容として取り入れた。生徒の記憶に残るよう、プレゼンテーションツールを活用し、グラフではなく画像とアニメーションで表現した(図表3)。

さらに、精子は毎日作り出されるが、原始卵胞は胎児として生命を宿った際に作られて以降新たに作られることはないことを理解し、「ずっと体の中にあるも

図表3 卵子の数の変化

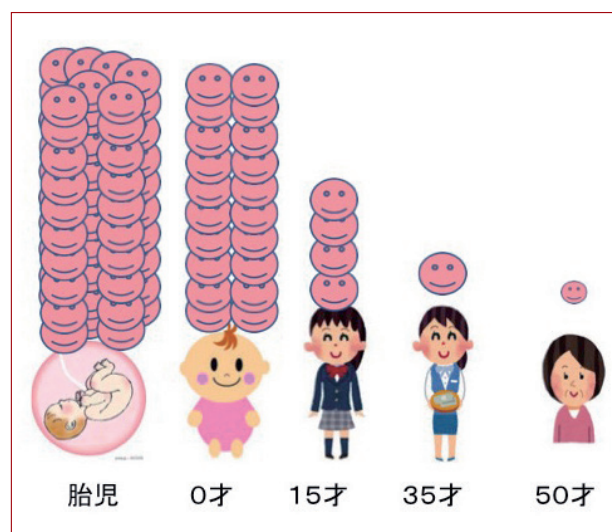


写真1 O×クイズ 卵子は毎日作られる？

の」という認識を持ってもらうために、生徒の興味を引き出すようクイズ形式を取り入れることとした(写真1)。このようにして、自らが新たな生命を生み出す可能性を秘めた存在であることに気付いてもらい、自分の一生をどうデザインするかについて考えるきっかけになればという思いで授業内容を検討した。

第3時の「生命誕生」では、妊孕性に影響を与える主たる要因の加齢を取り上げた。第2時で取り上げた加齢による原始卵胞数の減少を振り返り、加えて加齢により卵子の質が低下することを伝えることとした。「卵子の老化」という言葉はしばしばメディアで使われているが、この言葉には多分に否定的なイメージが伴っている。親が高齢で出産した生徒の場合、老化した卵子、つまり質の劣った卵子から自分が生まれてきたと考える生徒が出てくるのではないかと懸念があり、この言葉は使用しないこととした。

したがって、今回の実践では、誰もが精緻な生殖システムのもとで生まれたかけがえのない存在であること、生命を育む中で愛情を受けながら育ってきたこと

を実感してもらいたいと思い、発問や説明の際には「何年もの間、母親とともに年を重ねてきた卵子」、「母親の体内で大切に維持されてきた卵子」、「卵子は君たちの体の中で君たちとともに歳を重ねるんだよ」等、より中立的な言葉を使うこととした（写真2）。



写真2 「卵子はお腹の中で君たちとともに年を重ねるんだ」

また、「あなたが30歳、40歳になった時に、今と同じように体を動かすことができるかな？」といった問いかけをすることで、加齢による卵子の質の低下は自然なことであると印象付けることをねらい、どの生徒も卵子の質の変化を肯定的に受け取ることができるよう配慮した。

さらに、体重（肥満や痩せ）、喫煙が妊孕性のリスク因子であることも伝えた。一方向的な知識提供とならないよう、「子どもが欲しい時に大切なことは何？」という問いを与え、グループでの話し合いを取り入れた（写真3）。これまでダイエットが月経不順を引き起こすこと等指導されることはあったが、妊孕性に影響することは教えてこなかった。また、痩せのみならず肥満が妊孕性に影響を与えること、適正体重を維持することが大事であることを理解してもらうため、



写真3 「子どもが欲しいときに大切なことって何？」

個々の適正体重については養護教諭に相談できる旨を伝えた。

第3時は、生命誕生の仕組みを知り自他の生命を大切にしようとする態度を身につけることもねらいとしていたため、妊孕性の内容に偏重しないよう、これまで保健体育や学級活動で指導されてきた内容を基本としながら、加齢、体重（肥満や痩せ）、喫煙が妊孕性のリスク因子であることを簡潔に説明し、授業の中にコンパクトに組み込んだ。

第2時、第3時とも、閉経、卵子数の経年変化、造精機能と造卵機能の違い、加齢による卵子の質の変化、妊孕性の影響要因（加齢、体重、喫煙）等について、医学的に明らかになっている事実をわかりやすく明確に伝えること、中学1年生という発達段階を考慮し、自身に起こりうる事象として捉えさせるのではなく、科学的知識として定着することを重視した。

授業は、鶴城中学校の大橋勇一教諭と下益城城南中学校の太田隈美幸養護教諭がTT形式で実践した。今回の授業は中学生になって初めての性に関する授業であり、性教育の導入でもあったため、できるだけ「性」に対して忌避や抵抗等のマイナスのイメージを抱かせないように配慮した。

また、「性」について様々な面から語り合える、できるだけオープンな雰囲気づくりを心がけた。そのために班でのブレインストーミングやクイズ形式での発問など、生徒が意見を表明しやすい場面を多く設定した。掲示する資料はわかりやすさを優先したが、解剖学的に正確な断面図などを使うと、性に対してネガティブなイメージを招きかねない。したがって、生殖器の説明にイラストやフェルトで作られた模型などを使い、ソフトなイメージを抱かせるよう工夫した（写真4）。



写真4 「子宮の大きさはこれくらいなんです」

授業後の生徒の感想

第2時終了後に記述してもらった生徒の感想において、閉経に触れた生徒は、21人（36人中）であった。主な感想は、次のようなものであった。

- 月経には閉経といって終わりがあることを初めて知った。
- 月経の終わりは50歳頃だということを初めて知りました。
- 知らなかった言葉がひとつだけあります、それは閉経です。初経から始まり終わりが無いと思っていました。
- 私は月経に終わりがあるのは知っていたけど、何歳までかは知りませんでした。
- 女性には閉経があるけど、男性には閉経がないことがわかりました。
- 歳をとると閉経するのは知っていたけど、妊娠中は（生理は）ないということは初めて知ることができました。

加齢に伴う卵子数の減少に触れた生徒は27人であった。具体的には、次のようなものであった。

- 卵子が女性がお腹の中にいるときからあり、だんだん歳を重ねるにつれ減っていくことがわかりました。
- 卵子は毎日作られずに、逆に減っていくんだと初めて知りました。
- 今日一番驚いたことは卵子の数の変化です。最初は700万個もあったのに、最後は5000個になってすごくびっくりしました。もう少し残っていてほしかったです、それは命の誕生のもとになるからです。

などの声が聞かれた。

卵子が新たに作られることはないことに触れた生徒は10人であった。

- 卵子は毎日作られないことがわかりました。
- 男子の精子は毎日作られ、女子の卵子は毎日作られないことを知りました。
- 私は男子の射精は知っていたけど、女子の月経や卵子が毎日作られないことがわかりました。

などの感想である。

月経や射精は、新たな生命を生み出すための準備としての現象であることに触れた生徒は11人であった。

- 生理のこと、月経・射精の意味がよくわかりました。特に月経と射精はとても大事なことがわかりました。なぜなら新しい生命を作り出すためのしくみだから

です。子孫を残すための準備だということから、なくてはならないしくみだなと思いました。

- 今、思春期というのは赤ちゃんができる準備をしているんだなと思いました。
- 私はこの学習をする前に、射精や月経など恥ずかしくてなかなか考えないようにしよう、口に出さないようにしようと思っていました。でもこの学習を終えて、射精や月経は新しい生命を作り出す大切なものだとなっていて、なにかすっきりした気がします。
- 私は生理の時は体調が悪くなるので嫌だと思っていました。でも、赤ちゃんを産むための準備だということがわかりました。
- 新しい生命を作り出すために、男の人も女の人もいろいろな成長をしていることがわかりました。

などの感想が聞かれた。

その他に多く聞かれた内容は、精子が億単位で存在することや女性の月経は生涯で約400回あることを初めて知り、驚いたという感想であった。

他にも、

- 射精のこともわかりました。私は余り興味はないけど、知っておかなければいけないことだと思いました。
- 私は女の子なのに、体のしくみを全然知らなかったので学べてよかったです。
- これから今日のことを忘れずに生きていきたいと思うし、とっても大事だからしっかりと覚えておきたいなと僕は思いました。
- 赤ちゃんがいなかったら子宮から（血が）外に出されることがわかり、赤ちゃんがいるときは月経（血）が外に出されないで、子宮に残ってベッドになるということがわかりました。

などの感想が聞かれた。

第3時終了後に記述してもらった感想のうち、31人（36人中）の生徒が3億の精子の中から一つだけが受精できることの理解と驚きについて言及し、13人の生徒が生命誕生のしくみを理解できたと述べ、12人が受精に至るまでの精子や卵子の道のりについて触れていた。

具体的には、

- 今日受精のことについて知りました。一番驚いたことは3億の精子のうち、生き残れるのは1個しかないということです。精子と卵子でその子どもが決

まるのだなと改めて考えさせられました。

- 卵子と精子が出会うには時間がかかり、とても大変なことがわかりました。

などである。

妊孕性については、20 人の生徒が「喫煙」と「体重」が妊孕性に影響を及ぼすことに言及しており、

- 体重や年齢がちょうどじゃないと妊娠しにくいことがわかりました。
- 妊娠しやすい体にするためには、たばこを控えたり、無理なダイエットをしないということがわかりました。

などの感想が聞かれた。

一方、15 人の生徒が「喫煙」、「体重」、「年齢」の 3 要因に触れており、

- 妊娠したいなと思ったときは、たばこ、体重、年齢の 3 つに気をつけるようにします。
- 私は体重や年齢は関係ないと思っていたので驚きました。

といった声が聞かれた。

女性の年齢が妊孕性に影響を与えることの理解に言及した生徒は 8 人であった。

具体的には、

- 私は 30 歳を過ぎると、妊娠のチャンスが少なくなり、35 歳をすぎると妊娠のチャンスがダウンすることがわかりました。このことから年齢も関係することを知りました。
- 女性は歳をとると妊娠しにくくなるということもわかりました。
- 30 歳がやばい感じで、35 歳はちょうやばいらしいことを知りました。

などである。そのほか、

- 卵子が受精できる時間は 24 時間なので、限られた時間の中で受精しなきゃいけないんだなあと思いました。だから、「子を育てる」「子をつくりたい」といっても、すぐに作れないことがわかりました。
- 今日の授業で卵子と精子はどういうふうに結びつくのかなどがよくわかりました。
- 自分が生まれるのにそんなに長く時間がかかっているのを改めて知ることができてよかったです。
- 僕は一回精子を入れれば絶対に受精すると思っていたけど、受精を絶対にするとは限らないことがわかりました。

- 今回の授業で私は生命が誕生するまでの流れやしくみを知ることができました。

などの感想があった。

授業を終えて

今回、子どもたちが将来自身のライフプランを実現できるよう、生殖に関する正しい知識、とりわけ加齢を主要因とした妊孕性の変化について知ってもらえるよう性教育の授業開発に取り組んだ。第 2 時において、これまで教育されてこなかった閉経や卵子の数的変化を科学的知識として提供したことは、妊孕性への理解をよりスムーズにしたと考えられる。

一方、第 3 時については、「年齢や生活のあり方が妊孕性に与える影響を知る」ことをねらいのひとつとしていたが、生徒の感想からいくつかの課題が見えてきた。第 3 時では、主として年齢の影響を理解してもらいたかったのだが、生徒の感想を読むと、女性の年齢が妊孕性に影響を与えることの理解を具体的に述べていた生徒は 36 人中 8 人と少なく、むしろ妊孕性へのリスク因子である喫煙と体重についての印象が強かったようだ。体重については、肥満および痩せが妊孕性に影響することを説明したが、生徒の感想によると、数名は適正体重を維持することがより大切である旨の感想を述べていたものの、痩せの影響の印象が強く残っていたようで、「無理なダイエット」と表現している生徒が多く存在した。

これは、一般に思春期の子どもたちの健康問題として痩せすぎが問題視されており、子どもたちも無理なダイエットをしないよう普段から指導されていることが影響していると思われる。また、体重、喫煙に関しては妊孕性に影響することを伝えたつもりだが、妊娠中の影響としての記述が散見され、妊孕性のリスク因子を伝えることは容易でないことがわかった。今後は伝え方を精練していく必要がある。

また、体重に関して「私は自分の体型に合う体重ではないので少し不安になりました」と述べた生徒がいたため、このような生徒に対する個別の事後フォローも忘れてはならない。

今回の対象は中学 1 年生であり、一度の説明だけでは十分に理解できなかったと考えられるため、説明上のさらなる工夫を行うとともに、引き続き関連する教科等の単元で取り扱っていく必要がある。今後、加齢

に伴う妊孕性の変化について授業で扱う機会となるのは、中学校3年生と思われる。中3の理科では、有性生殖を学ぶ中でヒトの発生についても取り上げている。

この時期の中学校の性教育では、性感染症や望まない妊娠、避妊などの性行動にかかわるいくつかのテーマが取り上げられている。中学校卒業を間近に控えたこの時期に、生涯にわたってどう生きるのかについて考える機会を持つことは極めて有意義であろう。たとえば、自分の「未来予想図」を描かせる中で、発達段階に応じて妊孕性の経年変化に関する情報を与え、結婚や子どもを産み育てることについて考えさせていく等の活動が考えられる。今後、中学校3年生で行う授業についても提案、実践できればと考えている。

高校では、保健において生涯を通しての健康を指導することとなっており、なかでも「結婚生活と健康」の単元は、妊娠や出産に関する正しい知識を得る機会であると同時に、生徒自身の将来を考える契機になる。これらの単元で妊孕性に触れることで、生徒たちの理解がさらに深まり、将来のライフプランを考える上で妊孕性の知識を活用できるのではないかと。

また、2015年、文部科学省より高校生向け啓発教材「健やかな生活を送るために」が全高校生に配布された。この中の「19. 安心して子供を産み育てられる社会に向けて」、「20. 健やかな妊娠出産のために」において、妊娠のしやすさと年齢、妊娠や出産に影響を与える因子、不妊症等について記載されている。当該副読本を活用することも有意義である。断片的な教育ではなく、中学校から高校へと一貫して教育していくことが重要であり、我々も今後実践していきたい。

内閣府の少子化社会対策大綱には、妊娠や出産に関する医学的・科学的に正しい知識について浸透させるには、教職員への研修が必要と述べられている。我々も本授業を実践するにあたって、まずは教員の意識と知識を高めることの重要性に気づいた。また、同大綱は、学校教育だけでなく家庭、地域、職域に至るまで、教育や情報提供に関わる取り組みを充実させることの必要性にも言及している。子どもたちが妊孕性に関する正しい知識を身につけ、将来のライフプランを考える際に活用できるようにしていくには、学校だけでなく、家庭、地域、職域で連携しながら教育していくことが重要である。学校教育では、とりわけ保護者との連携を取りながら実施していくことが不可欠である。

おわりに

昨今の晩婚化や晩産化、不妊症患者の増加や患者年齢の高齢化、少子化の拡大に鑑みると、妊孕性に関する知識提供は社会的ニーズが高いと考えられる。しかし、最も重要なことは、妊孕性の知識を持たなかったことで妊娠適齢期を過ぎ、子どもを持つことができず後悔する人々を減らしていくことである。

つまり、近い将来社会的に自立し家族を形成していただく若者が、自分の望む人生を送ることができるよう支援していくことである。子どもたちには、「将来、知らなかったで後悔することのない人生を送ってほしい」と願っている。

【参考文献】

- 日本産科婦人科学会登録・調査小委員会 ART データブック (2013). <http://plaza.umin.ac.jp/~jsog-art/>
- 日本生殖医学会 (2013). 不妊症 Q&A http://www.jsrm.or.jp/document/funinshou_qa.pdf
- 文部省 (1999). 学校における性教育の考え方、進め方.
- 木村なぎ, 種部恭子 (2013). 晩婚化、晩産化に対し何ができるか～妊娠、出産年齢の意識調査結果より～. 母性衛生, 53 (3), 180.
- 在本佑子, 齊藤益子 (2010). 未婚女性の生殖の知識とライフプランとの関連. 日本母子看護学会誌, 4 (2), 13-21.
- Lampic C, Svanberg AS, Karlstrom P and Tyden T (2006). Fertility awareness, intentions concerning childbearing, and attitudes towards parenthood among female and male academics. Human Reproduction, 21 (2), 558-564.
- Peterson BD, Pirritano M, Tucker L and Lampic C (2012). Fertility awareness and parenting attitudes among American male and female undergraduate university students. Human Reproduction, 27 (5), 1375-1382.
- Bunting L, Tsibulsky I and Boivin J (2013). Fertility knowledge and beliefs about fertility treatment: findings from the international fertility decision-making study. Human Reproduction, 28 (2), 385-397.
- 秋月百合, 大橋勇一, 太田隈美幸, 今坂洋志 (2016). 加齢による妊孕性の変化を組み込んだ中学校性教育の授業開発～「二次性徴」「月経・射精」「生命誕生」の授業を通して～. 熊本大学教育実践研究, 33, 163-171.
- 大橋勇一, 太田隈美幸 (2015). 妊孕性の経年変化をどう扱うか～「二次性徴」「月経・射精」「生命誕生」の授業を通して～. 第45回全国性教育研究大会要項, 44-45.
- 内閣府 (2015). 少子化社会対策大綱. http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/law/pdf/shoushika_taikou2_g.pdf
- 文部科学省 (2015). 健康な生活を送るために－高校生用. http://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/hoken/08111805.htm

連載のテーマがおかしい？

早乙女先生と2年以上にわたって連載を続けていながら、今頃になって、「この連載のタイトルはいいの？」という疑問がわいています。「女子の性」、「男子の性」と言われると、「私の性は？」と思う人がいて当然です。じゃあどのようなタイトルがいいのかとなると名案は浮かびません。もちろんLGBTについても触れていますが、もしかしたら「もっと知りたい『女子の性』、『男子の性』、『LGBTの性』」という3つの枠にした方がよかったのかもしれない。

本当に「性」というのは難しいですね。ちなみに、本号以降も「男子」「女子」という表現を使いますが、あくまでも便宜的なもの、わかりやすい表現として使い、決してLGBTの方の存在を認識していないのではないということをご理解、ご容赦いただけると幸いです。

* *

売春防止法も時代遅れ

性の話で避けて通れないのが性産業です。最近立て続けに性産業に従事している人に関する相談を受けていますし、以前から性産業に従事している方の診療もしています。性産業の歴史は古く、私が住んでいる横浜でも、関内駅に隣接する横浜 DeNA ベイスターズの本拠地の横浜スタジアムがある横浜公園には1859年（安政6年）に開業した港崎遊郭がありました。もちろん1958年に完全施行された売春防止法で禁止されているものの、援助交際という言葉に代表されるように、買売春をする人は相変わらずいます。

売春防止法を改めて読むと、第一条に「この法律は、売春が人としての尊厳を害し、性道徳に反し、社会の善良の風俗をみだすものであることにかんがみ、売春を助長する行為等を処罰するとともに、性行又は環境に照して売春を行うおそれのある女子に対する補導処分及び保護更生の措置を講ずることによつて、売春の防止を図ることを目的とする」とあります。この法

律では男子やLGBTが売春を行うことは想定外なのか、男子やLGBTの売春は性道徳に反しない、法に抵触する行為ではないという解釈なのでしょう。実際、男子高校生を売春をした時に適応されている法律は「児童買春・児童ポルノ禁止法」です。成人男子同士の買売春は合法？ それとも脱法？ 難しいですね。

* *

男子売春の実態

男子が自分の体を性行為を目的に売する場合、買い手が女子の場合も男子の場合もあり得ますが、ここでは男子が男子を買春することを考えてみます。

そもそも、「男子の買売春なんてあるの？」と思っている方は「ゲイ ボーイ」と入力し、ネットで検索してみてください。ボーイというのはゲイ用語で男娼、体売る男子のことです（Wikipedia）。ボーイの相場を、実際にボーイをしている人に聞いたところ、8,000～12,000円と教えてもらいました。もちろん、地域によっても、また提供するサービスの形態によってもいろいろだそうです。コンドームを使う場合も使わない場合もあるとのことでした。

* *

父親が息子を連れて行った時代も

かつてはトルコ風呂と呼ばれていたソープランドで売春禁止法に抵触するサービスが行われているというのは暗黙の了解事項で、昔はソープランドに父親が童貞の息子を連れて行ったという話はいろんなところから聞こえてきました。しかし、近頃はそのようなお客さんはいなくなったそうです。

泌尿器科の臨床をしていると、実際に買売春や性風俗産業で性感染症をもらってきたという患者さんの生の声を繰り返し聞かせてもらいます。どの患者さんも、どこにでも暮らしている、普通の人です。しかし、このような情報を持たない一般の人たちにとって、買売春や性風俗産業の実態は見えないというのが正直なところではないでしょうか。



* *

一番身近な性産業

一般の、多くの男子にとって一番身近な性産業はAV（アダルトビデオ）です。性に関わる仕事をし続けているといろんな人脈ができ、AVに出ていた、あるいは出ている人たちとの接点が増えていきます。

先日、現役のAV男優さんたちとトークイベントで話す機会を得た時に、次のような質問を男性の参加者にふりました。「絶対身元がばれないとしたらAVに出てみたいですか」と。その場にいた正直な男性たちは全員「はい」と答えていました。男性読者のみなさんだったらどう答えますか。

もちろん、周りに撮影スタッフがいるのか、病気はないのか、コンドームを使うのか、といった事細かなことを質問した後に答えたいという人も少なくないでしょうが、そもそもAVを見たことがあるというだけで、「自分自身がAV男優さんたちと同じような立場に立ちたい、経験をしたい」と言っているようなものだと認めざるを得ません。

* *

ファンタジーって何？

AVに洗脳された結果、AVで描かれているセックスが普通だと思い込み、「あのような激しいセックスはできない」とセックス拒否症になったり、逆にセックスの最後は顔面射精で終わるものだと信じ、そのようにし続けたりしている人が少なくありません。このような人たちを何とかしなければと立ち上がっている元AV女優さんや現役のAV男優さんたちがいます。このこと自体はありがたい(?)のですが、この話になると以前、カリスマAV男優の加藤鷹さんと交わした会話を思い出します。

岩室：AVのようなセックスをしている人はいないというテロップを入れられないでしょうか。

加藤鷹：そんなテロップ、誰もみませんよ。

確かにそうですね。見ている人も、描かれている場面はあり得ないものと思いつつ、だからこそ楽しめるんだと納得していました。元AV女優さんも、現役のAV男優さんたちも、「多くの人の殺戮が繰り返される映画の中の出来事を本物と思わないのに、どうしてAVは信じてしまうのでしょうか。AVを信じないでく

ださい。AVはあくまでもファンタジーです」と呼びかけていました。ファンタジーとは空想、幻想、創作といった、実世界とはかけ離れた虚構、フィクションを指しています。AVに限らず映画、映像の世界はあくまでもファンタジー、フィクションだとかつては思われていましたが、いまはどうもそうではないようです。

* *

現実がファンタジーに？

ファンタジーを信じる人がいるのであれば、リアルな世界が、現実がファンタジーになり得るのではないだろうか。そこをねらって(?)大ヒットした漫画が映画になっていました。

別冊少年チャンピオンに連載中の「セトウツミ」の映画を見て不思議な感覚を覚えました。キャッチコピーが「この川で暇をつぶすだけのそんな青春があってもええんちゃうか」。実は、どこにでもあった（ここが大事で、かつてはあった）現実が、現代人にとって実はファンタジーの世界になっていたのです。

昔の人にとってファンタジーだったAVが、現代社会ではリアルな教科書となり、リアルであるはずの世界がファンタジーになっている逆転現象が起きているのが現代社会なのです。

* *

AVで病むところ

AVを教科書と信じ込み、男の性欲である独占欲、支配欲に加え、射精欲をAVのような形でしか表現できない人をどう理解すればいいのでしょうか。

精神科医の春日武彦先生は「ここを病むとは、その人のものごとの優先順位・価値観が、周囲の人の常識や思慮分別から大きくかけ離れてしまうこと」と言っています。また、そのようなこころの病の治療には誰かの「客観性や経験、情報、余裕、想像力に学ぶ必要がある」としています。

AVの世界をリアルの世界、正常な、あるべき姿と受け止めてしまうと、気が付けばいろんなトラブルに巻き込まれ、生きていくのがつらくなってしまいます。そのような人たちを予防するためにも、やはりAVは5人以上で見てみんなで正直な感想を言い合うのがいいのでしょうか。でも男子はプライドの生き物なので他者に学べない。難しいですね。

連載第4回 ▶▶ なぜ「既読無視」されるのかわからない？

私は中2で今高2の人に片思いをしています。

その人とはLINEをしているのですが、最近全く返事が返ってきません。

私が質問しすぎたせいでしょうか？

なぜ「既読無視」されるのですか？

携帯電話やSNSはとても便利なもので、今の時代、これらなしでは生活ができないと言っても過言ではありません。もちろん弊害も多くあり、そのために使用するまでにしっかり使い方を学ぶ、教える必要があります。それも具体的に何度も失敗をしながら学ぶことが大事です。大人（親）も一緒に勉強し、仲間としてSNSやLINEを使って連絡が取り合えるそんな関係が理想です。

LINEのグループの仲間の助けで辛かったこと、怖かったこともささえられて乗り切ることができた、LINEグループがあるから自己肯定感を持つことができた、というメールもよくもらいます。

もちろん悪いこともたくさんあります。

- ・LINE外しや悪口を書かれていじめを受けている。
- ・勝手に動画や写真を撮られて流された。
- ・友達に送ったメールや写真を他人が持ってる。
- ・出会った人に性的行為を求められた、ストーカーされて困っている。

ただこれらの内容は、使用する前にしっかり勉強することである程度防止できますが、使い始めてからはなかなか改善できません。またメールやSNSをする場合、とくにWebの中にもりつきりになって、その人とだけ話し合っているいろいろなことを決めようとします。なんでも話せる友人や大人がいて、メールや掲示板での内容を相談することができれば、メールで知り合った人からの性被害やいじめに会うことは少なくなるはずですよ。

さてこの人の相談に関してですが、送ったメールに返事がきません。恋愛から考えれば、相手の気持ちが冷めただけなのかもしれません。既読のサインが付い

ているにもかかわらず返事が返ってこない「既読無視」状態です。わたしは性教育講演で既読無視されたらそれはされたほうに問題があると話しています。

なぜ無視してしまうのでしょうか。多いパターンは、相手がスタンプばかり送ってくるから返事しづらい。考えなければいけない内容なので簡単に返事できない。ネガティブなことばかり言われて返事しにくい。

つまりメールを送ったほうに問題があるのです。「既読無視するようなメールをあなたは送ったんだからね」と言っています。メールを送るほうは、すぐに返事が返ってくるとは思わないでください。またメールを受けても、すぐに返す必要はありません。

子どもたちに語るとき禁止を語るのではなくやり方を語る必要があります。自分の周りにはいない素敵な人と知り合えるチャンスをつくるには、Facebookがよいでしょう。

顔写真が本物で学校名や会社名がきちんと書いていて、その証明に友達に同じ学校の同級生や会社仲間がちゃんという人、書き込みが少ないのに異性の友達が多い人は要注意です。二人だけの世界には絶対に入らないこと、二人の関係は秘密と言ってきたら怪しいので距離をおきましょう。つき合いたいとか好きになったら是非、会ってみましょう。メールの中ではどんな人かもわかりません。きちんと顔が見れる関係になりましょう。会いに行く時は最低3人以上の友達と一緒に会ってください。あなたのこと本当に思っている人なら友達と一緒に会ってくれます。どんな理由でも二人っきりで会いたいという人は絶対に怪しいので会わないことです。友達仲間として迎えながらお互いを知り合うことから始めましょう。

BOOK GUIDE

今月のブックガイド

宝物箱みたいな本、本みたいな〇〇

「うわあっ!」と思わず歓声を上げてしまったステキな本。イエロー、ピンク、水色のカラフルな3冊が収められた可愛いボックス…そして、それぞれの表紙を飾っているのは、絵本作家である荒井良二さんの鮮やかな色彩! スウェーデン政府が創設した児童少年文学賞であるアストリッド・リンドグレン記念文学賞の日本人初受賞者としても知られている荒井さんの作品は、優しい色たちの強烈な個性が感じられるものばかり。カラフルな調和と個性は、まさに本書が示す〈いろいろな生きかた〉の世界観そのもので、本を開くまえからワクワク感が高まっていく。このまま部屋に飾っておいてもいいくらい! …なのではあるが、もちろん中身も素晴らしい。

①『いろいろな性ってなんだろう?』、②『だれもが楽しくすごせる学校』、③『ありのままでいられる社会』の3巻を通して、マンガやイラストがふんだんに用いられ、多様な性のありようがわかりやすく説明されている。なかでも本書を特徴づけるのが、総勢35名にもわたる人々へのインタビュー記事である。さまざまな登場人物の声を聴くことで、〈みんながう〉というあたりまえの現実を認識させられる。本書の対象は「小学校中学年以上」なので、子どもにとっては、登場人物たちの写真を見て〈いろんな人がいる〉と実感できるのは、なにより確かな学びになるだろう。私にとっては、性教育や性の健康に関する分野で一緒に取り組んできた仲間たちも登場しており、知らなかった一面に触れてホロリときたり、勇気づけられたり。子どもに限らず、大人が読んでも十分読み応えのある内容だ。

本書は、性の多様性やセクシュアルマイノリティについて理解する本ではない。いろいろな人生を知ること、自分は思うのか、自分はなにをしたいのか、



①『いろいろな性ってなんだろう?』

いろいろな性、 いろいろな生きかた

(全3巻)

監修：渡辺大輔

ポプラ社

定価 3000 円＋税（1 巻あたり）

自分自身のことを知るための本である。自分の生きかたを考えるためのカラフルなガイドブックのようであり、登場人物はその道筋を〈それぞれの体験〉から照らしてくれる。これまでの社会で〈ないもの〉とされてきた存在や生きかたを、自らの人生を語ることによって〈ここにもある〉と伝えてくれるのだ。個人のありようはもちろん、親子、家族、パートナーといったさまざまな関係性や多様な職業から照らしだされる体験談は、さながら「人生のハローワーク」ともいえる。

監修者の渡辺大輔氏は、3巻のあとがきで、国連の「子どもの権利条約」を紹介しながらこう述べる。「だから、みんなの自由や平等が守られていないと思ったら、意見をいって、話しあいをして、きまりを変えたり、つくったり、なくしたりしていくことができるんだ」と。この社会をつくっているのは私たちである。みんながしあわせだと思える社会を私たち自身がつくっていくこと。性の多様性を知ること、今ある社会を見直し、変えていくことができる。それはだれかへの配慮や支援ではなく、だれもが生きやすい社会をつくるためのみんなの努力なのだ。だれもが傍観者ではいられない。

ステキな装丁に、カラフルなコラムやインタビューが詰まった本書は、まるで宝物箱のような本である。本を手にした子どもは興味や好奇心をそそられて、びっくり箱のように楽しめるだろう。今、自分の性に悩んでいる子どもにとっては、薬箱として助けられるはずだ。私の同僚のように「伝統あるポプラ社からこうした本が出版されるとは」と驚いた年長者にとっては、時代の温度を知る百葉箱になるかもしれない。この本がどんな〇〇になるか、それも読み手にとって〈いろいろ〉だ。どの巻にも、「にじいろ図書館」という詳しいブックガイドや支援団体一覧が載っているのも便利。全国の学校の図書館や保健室に、ぜひこのステキな本を置いてほしい。（大阪大学大学院准教授 野坂祐子）

故・島崎継雄氏を偲ぶ



日本性教育協会（JASE）第2代事務局長であった島崎継雄氏は、病気療養中のところ平成28（2016）年4月27日、逝去されました。島崎氏はJASE勤務時は無論のこと退職後も性教育の普及に尽力されました。ここに各界の方々の追悼文を掲載し、つつしんでご冥福を祈りたいと思います。（JASE事務局）

<略歴>

1934年1月1日東京都品川区生まれ。58年早稲田大学教育学部卒業。株式会社小学館に入社し、女性月刊誌、少年週刊誌などの編集者を経て、74年より財団法人日本性教育協会（JASE。現・一般財団法人日本児童教育振興財団内 日本性教育協会）に勤務。事務局次長、事務局長、評議員、理事などを歴任。JASE退職後、性科学情報センターを設立、さらに公益財団法人性の健康医学財団専務理事、日本性科学連合監事として性教育の普及に国内外で精力的に活動し続けたが、2016年4月27日午後7時59分、死去。享年82歳。おもな共著書に『性の指導総合事典』『中国人の性事情 開放と抑圧のはざままで』などがある。

JASEの活動は島崎さんの存在が大きかった

宮原 忍

（元横浜市立大学教授）

JASEの関係では、島崎さんとは、付き合いの長いほうだが、思い出は大きいものの、文字に出来る量は、それほど多くない。私の年齢のせいもあるが、お許し願いたい。

JASEは、山本宣治の伝統を継いで早くから若者の性行動調査を手掛けられた朝山新一教授と医学評論家・村松博雄氏を中心として発足した。小学館から事務局長として富田光一氏が来られ、島崎さんが富田さんを支える形だった。

ところが、出発後8年目に朝山・村松両氏が相次いで亡くなり、その後もお二人の路線から外れることなく順調に進むことができたのは、島崎さんの存在が大きかったと推測される。

JASEは精力的に研修会や海外研修を頻繁に開催したが、企画会議などで、資料の計画をするとき、島崎さんが、まず、資料のページ割を図示するところから始めるのは、さすが、雑誌編集のベテランという印象があった。研修会では、大家の講演のあとに教材スライドや実習の運営にあたるが多かったように思う。教師が多かった研修会の中で、島崎さんのお洒落な服装が目立っていた。

JASEを離れてからも、いつもJASEを気遣っておられた。島崎さんは、キリスト者であり、しかも私の大学のクラスメイトが彼の教会での親友であったというのは、かなり後になって知ったことである。波多野先生もキリスト者で、私の家を含めて、3つの家は、夫婦ともどもよいお付き合いをさせていただいた。

軽井沢で、手料理を御馳走になったり、ロイヤル・コペンハーゲンのお皿のコレクションを拝見したのもよい思い出であった。

葬儀の故人の照会文に堀辰雄のファンとあったが、文学についてもっと話ができたらよかったと思う。

「人脈調整力」「人事管理能力」に 長けた島崎さん

波多野義郎

(東京学芸大学名誉教授)

島崎さんは、株式会社小学館から派遣されて1974年に財団法人日本性教育協会（JASE）の事務局次長として来られ、1983年から12年間 同事務局長として勤務された。小生は1978年から同協会評議員、1982年から理事として奉仕させて頂き、そのまま現在のJASE 運営委員を務めさせて頂いている。

最初は先輩役員の先生方のお手伝いをさせて頂いていた小生であるが、1988年 WAS大会（ハイデルベルグ）以来海外行事に数多く参加し、一時は宮原忍先生とともに WAS 役員をさせて頂いたり、JASE の性行動調査結果の海外への報告者役を務めさせて頂いたりした。そのような役員の活動は、全て「シマさん」がお膳立てをして下さった。事実、島崎事務局長も多数の国際大会に出席し、常に参加者と交流を重ねておられた（例として写真1、1993年 WAS ブラジル大会）。

宮原・波多野が日本代表で派遣された1991年12月 WAS大会（南米カラカス）の役員会席上で Wabrek 会長から「1995年世界大会を日本で開催」と言う宿題を言い渡され、2人でどう説明したものかと悩んでいた所「僕たち3人で協力すれば出来ますよ。小学館（スポンサー）へは説得します」と島崎氏が受け止めてくれ、以後この3人組がJASE 国際活動の荷を背負うストーリーとなった。

WAS大会で知己になったアジア各国の性科学者が香港に集まった研究会（1990年）には日本から（香港以外で最大グループ）20名余が出席し、これを機に AFS（アジア性科学学会）が発足（設立は遡って1990年）するのだが、それは日本の関係者を支えた島崎さんの「人脈調整力」のお陰があつての事だった。そしてそれが最も功を奏したのが、JASE（後にはJFSも）中心で開催された3つの国際学会大会（1995年横浜 WAS<事務局次長>・2000年神戸 AFS<事務局長>・2012年松江 AOFS<事務局長>）の企画・準備・実施の局面でのことだった。とも角、組織・プログラムに配する人物を一人ひとり掘り出して、遠路でも厭わずに丁寧に依頼に赴き、そしてその仕事の実行される



写真1 コールマン WAS 会長を囲む
(右から宮原忍・島崎継雄・松本清一・波多野義郎)

ように念を押す人事管理能力は、正に彼がそのために生まれて来たかのような感があった。

WAS大会に絡めて開催近隣国を訪ねる旅を計画してくれたが、愛妻家に相応しく、しばしばご夫人も同行された（写真2、2001年 WAS パリ大会後にノルウェー・グリーグ館にて）。



WAS 横浜大会（1995年）は故・松本清一先生を中心

写真2

にして、国内性科学関係5団体が協力し合って開催・運営された。大会後にその協力関係を形に残し設立されたのが（6団体による、現在は7団体）日本性科学連合（1996年）であったが、これもつなぎ合わせ（ペースト）役を果たしたのが島崎さんだった。以上の経緯は小生が協会に関わった過去約40年の中で起こり、島崎さんが実質の事務方として全てを運んで下さったのだ。JASE が単なる国内組織であった所から世界的組織の拠点へと発展させた、その縁の下のエンジン役を見事に果たしたと言えよう。世界のリーダーたちとリラックスマードで談笑するお姿が忘れられない。

宮原・波多野兩人にとっては、長い間の家族ぐるみの付き合いになったので、今年（2016年）1月のある日、陰に陽に支え合って歩んで来た3人グループ（夫人方を含めて6名）で、来し方を語り合う小パーティを開いた（写真3）。

すでに病が進行していたにも拘らず、最後まで明るく人懐かしい表情



写真3

が印象的である。しかしそれは島崎さんの送別会になってしまった。親友の一角が他界したことは寂しい限りである。

島崎さんの著作として下記の一文（英文・共著）を紹介したいと思う。日本のセクシュアリティに関する包括的な論説論文であるが、歴史的考察の中で彼の文学的視点が輝いている。Tsuguo Shimazaki and Yoshiro Hatano, The Sexuality in Japan In T. Franceour（ほか編, 2004）The Continuum Complete International Encyclopedia of Sexuality, N. Y. Continuum Inc. pp. 656-678.

今年3月末に釜山で開催のAOFS大会の折に、各国役員の中で数名が「日本に行く度に世話になったシマザキは元気か？」と尋ねてくれたが、彼らの「お元気で」と言う言葉をお届けする機会はなかった。シマさんはあの笑顔で、今日は天国のどの岸辺に佇んでいるのだろうか。



島崎さんと性行動調査

原 純輔

（東北大学名誉教授）

島崎継雄氏の訃報には驚いたが、もしかしたらと軽井沢の別荘を閉じられた頃から抱いていた危惧が、早すぎる現実となってしまったという想いがする。

島崎さんとの出会いは、1981年の性行動調査（第2回）に参加したときである。私の役割は、第1回調査では大・中都市の高校生・大学生に限られていた対象を、町村部と中学生にまで拡大して、文字どおり「青少年の性行動全国調査」に、かつ長期的な継続調査に変えて行くことであった。質問項目や質問内容の整備に私自身も努力したが、島崎さんには、調査協力校の確保に、多彩な人脈を生かして大変な奮闘をしていただいた。来年第8回を迎えるこの性行動調査の、基礎固めともいえる第2回、第3回（1987年）は、島崎さんの存在抜きには考えることができない。

また調査終了後は、『現代性教育研究月報』などの執筆機会を提供する形で、若手調査メンバーの支援にも心を配っていただいた。このことにも感謝している。

島崎さんが日本性教育協会を退かれ、私が横浜（東京都立大学）から仙台（東北大学）へ移ってからは、



パリで開かれた第15回世界性科学会議終了後の北欧ツアーの一コマ。コペンハーゲン（デンマーク）のチボリ公園にて。島崎さん夫妻のほか、松本清一・波多野義郎・宮原忍・石川弘義・佐藤ち江・原純輔氏など、当時の日本性教育協会重鎮の顔が見える（2001年7月2日夕刻）

事務局で頻繁に顔を合わせるということは減ったけれども、プライベートなつきあいはむしろ深まった。

仙台に移ってからも、夏は山梨の八ヶ岳山麓で過ごすことにしている。車で、また首都圏を避けて、東北・北関東・関越・上信越自動車道を経て長野県の佐久まで行き、国道141号線でJR小海線と千曲川に沿って山梨に出る。途中、栃木県か群馬県内で一泊し、往路か復路のいずれかで軽井沢小倉の里の島崎さん宅へ立ち寄るのが恒例となっていた。追分の蕎麦店まで一緒に昼食に出掛けたこともある。

例によって島崎さんは、やりかけている仕事のこと、通院している佐久の病院のことなどなど、快活に話されたが、一つだけ忘れられないのは、町田から横浜の鶴見に自宅を移された訳をたずねたときのことである。「（鶴見は）教会の友達が多いから」という答えが返ってきた。島崎さんの行動の芯のようなものがみえる気がした。

いろいろ思い出は尽きないが、島崎さんの御冥福を心からお祈りしたい。



性科学者として育ててくれた 島崎継雄さん

大川玲子

（日本性科学会理事長 産婦人科医）

JASEの創設時から日本の性教育、性科学を事務局として担ってきた島崎さんは、多くの性科学者を育てたが、私もその一人と思っている。少なくとも20年以上のおつきあいである。出会いはJASE主催の性科学セミナーだったと思う。若手の育成と、中堅・ベテラ



第12回 AOFS 大会（松江）懇親会で、大川会長から大会開催功労感謝挨拶を受ける島崎氏と今福貴子氏。

ンの刺激を意図したセミナーでは、学術の宮原先生と事務局の島崎さんの存在が頼もしかった。会場となった品川コクヨホールは、筆者にはなつかしい場所である。

性教育、性医学・心理学、社会学、政治学などを結びつけ、「性科学」やがて「性の健康」として発展させたのは、性の健康世界学会（WAS）である。日本では JASE が中心となって WAS と繋がった。それが結実したのが、1995 年の第 12 回世界性科学会（横浜）であり、事務局長の島崎さんは八面六臂の活躍であったが、そこで世界中の性科学者の知己を得たのである。

筆者がこの活動に参加したのはその後のことで、とりわけ 1997 年に WAS のアドバイザーメンバーに就任してからは、頼りない筆者を、島崎さんは様々な形で支えて下さった。さらには 2000 年、2012 年と 2 回のアジア・オセアニア性科学会（AOCS）の開催も、事務局長というより、会長はじめ主催者の牽引役を買って出られた。記憶に新しい 2012 年松江大会では、年齢に加えて体調も優れなかったにもかかわらず、会長を務めた筆者のわがままも聞きつつ、関係部署を駆け巡って下さった。松江の市内、会場、島根大学の下見やあいさつに同行した際、しじみ屋を探して奥様のお土産を買うのにおつきあいしたが、これはご自分で調理するのだそうである。残念ながら知る人ぞ知る島崎さんの手料理を、それも軽井沢の別荘でいただく、という約束は果たせずにしまった。

島崎さんを語るには（性科学以外の面は知らず）、横浜 WAS 以後の活動は、JASE という活動拠点を離れておられたことに触れなければならない。従って活動資金はご本人が目指すレベルになかなか届かず、ご家族にも負担をかけられたのではないだろうか。病気になっても禁煙せず、パソコンは使わず、自分流を通した島崎さんは「男」として幸せな人生をおくったのではないかと想像している。



「最近はどうしてんだい」

——よく通るあの大きな声が聞こえてくる

東 優子

（大阪府立大学教授）

記憶の中の故人が背中を少し丸め、サファリジャケットにノーネクタイで、喫茶店「さぼうる」（神田神保町）に向かって歩いている。ホットコーヒーを注文しておきながら、「熱いのは飲めねえんだよ」と銀スプーンで氷をすくい入れる。同じく猫舌の私も、いつしかその「儀式」を真似るようになった。実は今でもホットコーヒーに氷を入れて飲む癖がある。私は、その「さぼうる」で、日本の性教育の歴史を学んだ。

初めてお会いしたのは、私がまだ小学生の頃だったのかもしれない。記憶にあるわけではないが、性教育者だった父に連れられて同業者が集まる場によく出入りしていたので、そうだったとしても不思議はない。

故人との「出会い直し」は、性科学者を志して大学院に進学した 1990 年前後である。JASE 資料室に出入りするようになり、島崎事務局長から仕事を依頼されるようになった。最初の大きな仕事は、JASE 創立 20 周年記念講演に招聘された性科学界の巨人ジョン・マナーの通訳兼アテンドだった。その後も、技術も経験もなかった 20 代前半の私を、パープロ・アクセルソン（スウェーデン性教育協会）やジューン・ライニッシュ（キンゼイ研究所）など、賓客の通訳に起用してくださった。

1995 年に横浜で開催された WAS（世界性科学会）国際会議で、このテーマとしては国内初となったシンポジウム「日本におけるトランスセクシュアリズム」が開催できたのも、島崎さんによるところが大きい。留学中の私が、企画を思いついたまではいいものの、起案の手続きや会議運営のことなどまるでわからず、無知ゆえに「一般公開にしたい」「参加費は無料にして欲しい」など、好き勝手な要望をハワイから FAX で送りつけた。それを島崎さんは、サテライト・シンポジウムという形で実現してくださったのである。

こうしてお世話になった日々思いを馳せる時、「お前さん、最近はどうしてんだい」という、あのよく通る大きな声が聞こえてくる気がする。故人は、いつも私を「優子」と呼びすてにしたが、ありがちな



右から島崎継雄、今福貴子、波多野義郎の各氏
(2012年 AOFSS・島根大会にて)



右から東優子、島崎継雄、ミルトン・ダイヤモンド、池上千寿子の各氏 (2015年8月 全性連・熊本大会にて)

「ちゃん」付けではなく、「おんな・子ども扱い」される感じとは違っていた。国内外の性教育・性科学を牽引してきた多くの諸先輩にご紹介いただいたことを含め、故人にはとてつもなく大きな財産を与えていただいた。ここに改めて深い感謝と追悼の意を表したい。



島崎さんは「鉄ちゃん」だった？

井上敬三

(元小学館専務・少年サンデー編集長、
元日本性教育協会評議員)

島崎さんと机を並べて仕事をしたのは45年ほど前の少年サンデー時代。少年週刊誌と言っても今のような、まんがばかりの内容ではなく、ニュースや科学記事や読み物もある少年向け総合週刊誌でした。蒸気機関車 D51 デコイチをテーマにした連載小説が企画に上がり、島崎さんが担当されました。私の故郷福井の北陸線柳瀬トンネルをはじめ長い勾配の強いトンネル



右から島崎継雄、高田（鍛冶）良実、東優子の各氏
(1995年 世界性科学学会・横浜大会にて)

が何か所もあり、そのトンネルを舞台に、煙にまかれ苦闘する機関士たちの喜びや悲しみを相良俊輔・高荷義之両先生の熱筆で作品化しました。島崎さんは案内した鉄道員も驚くほどの熱心さで、今庄機関区を中心に12か所のトンネルや4か所のスイッチバックを踏査してきました。廃線となった杉津駅からみた夕日の日本海、その絶景の中をデコイチが喘ぎながら走る姿を熱く語っていました。

それから何年後、日本性教育協会の仕事でまた一緒にになりました。日本全国、津々うらうら各県巡り歩いて、全性連などの全国大会や性教育セミナーの活動を支援していました。そういう活動が発展して、1995年横浜で開かれた「世界性科学会」の成功につながりました。

私の生まれ育った武生（現越前市）出身の明治時代の先達、土肥慶蔵の事績を調べたいと再び北陸へ出かけることができました。武生に古い図書館があります。そこで100年前の性科学者の生い立ちや何やら見つけてきて喜び帰ってきました。土肥先生のお墓が多磨墓地にあるというので、二人で探しに行ったこともあります。墓地の事務所では個人情報に盾に遺族の承認がなければ所在を教えないと拒否され、やむなく人から聞いてきた情報を頼りに東郷平八郎・山本五十六両元帥の墓の裏手で見つけることができました。島ちゃんは現場を見ないと気が済まない、足で稼ぐ玄人好みの編集者でした。

ここ数年、自分史のようなものを計画されていたのではないかとおられたので、形になったら見せてほしいと尋ねたところ、「うーん、あれやこれや、うーん」と言葉を濁したのが、平和病院の病床で聞いた最後の島ちゃんの言葉でした。

全国性教育研究団体連絡協議会

▶▶ 8月5日(金) 10:00～16:40
8月6日(土) 9:30～16:00 ◀◀

第46回 全国性教育研究大会

第26回関東甲信越静性教育研究大会

テーマ

“思春期”に寄り添う

プログラム

- 1日目**：10:00～10:50 **開会行事** 挨拶・祝辞・開催地報告・次期開催地挨拶
11:00～11:50 **基調講演** 「特別活動における男女の人間関係の指導について」
安部恭子（文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官）
13:00～14:30 **特別講演Ⅰ** 「10代からの情報キャッチボール入門」
下村健一（元TBSアナウンサー）
14:35～16:15 **特別講演Ⅱ** 「セレブオネエ・ピカ子とドクター北村 思春期を語る」
本田ヒカル（ピカ子）（メイクアップアーティスト）
北村邦夫（日本家族計画協会理事長・ぐんま思春期研究会顧問）
16:45～18:15 **懇親会** 前橋テルサ 12階（会費5,000円。参加自由）
- 2日目**：9:30～12:00 **分科会**
「小学校における性教育の実践」「中学校における性教育の実践」
「高等学校における性教育の実践」「特別支援学校における性教育の実践」
「I・T社会における性教育の実践」「相談機関における性教育の実践」
13:00～15:50 **課題別講義**
「女の子の性をめぐって～女性アスリートを応援しよう！～」
蓮尾 豊（あおり女性ヘルスケア研究所所長）
「若者のライフデザインをめぐって～どう伝える産むと働く～」
種部恭子（女性クリニックWe! TOYAMA 院長）
「男の子の性をめぐって～思春期男子への性教育再考！～」
今井 伸（聖隷浜松病院泌尿器科主任医長）
「思春期のDVをめぐって～思春期外来・メール相談から見える現状とサポート～」
上村茂仁（ウィメンズクリニックかみむら院長）
「施設で暮らす子どもたちをめぐって～社会的養護としての性の支援を学ぼう～」
佐々木 玄（児童養護施設エス・オー・エスこどもの村）
「ピアカウンセリングをめぐって～思春期ピアカウンセリングからの発信～」
池田優子（高崎健康福祉大学保健医療学部看護学科学科長）

会場 前橋テルサ（前橋市千代田町2-5-1 TEL 027-231-3211）

参加費・問い合わせ先等

参加費／両日参加：一般6,000円、学生2,000円、1日参加：一般3,000円、学生2,000円

主催／全国性教育研究団体連絡協議会、関東甲信越静性教育研究団体連絡協議会、ぐんま思春期研究会

協賛／日本性教育協会 後援／内閣府、文部科学省、厚生労働省ほか

問合せ先／メールアドレス：46seikyoutaikai@gmail.com（メールのみで受付）

定員・締切／400名・平成28年7月15日締切（ただし定員になり次第締切）

8/5 (金)
8/7 (日)

第23回 AIDS 文化フォーラム in 横浜

つながる ひろがる わかちあう

1994年、エイズ国際会議を契機にはじまった、市民による「AIDS文化フォーラムin横浜」。“文化”の2文字、それはフォーラムが医療や福祉の問題だけでなく、すべての人間が、HIV/AIDSに関わりを持ちながら、日常の生活・社会的活動を行っているという側面を大切にしたいから....。フォーラムは、今年も、教育、医療、看護、女性、薬害、PLWHA、人権、社会問題、セクシュアリティ、国際 etc... 多くの社会的課題を考える場となります。

★主なプログラム★ (詳細はホームページをご覧ください)

- 〈1日目〉10:00～ オープニング:脳性まひの障がいを持つ熊谷晋一郎先生と「自立は、依存先を増やすこと」、「希望は、絶望をわかちあうこと」について考えます。
15:30～ 講演会 (講師・松本俊彦氏):HIV/AIDSだけでなく、自傷行為、薬物依存、若者たちと向き合う、今、最も熱い精神科医。
- 〈2日目〉10:00～ 講演会 (講師・岩室紳也氏):学校のできる、LBGT、薬物、こころ、そして性の教育。
13:00～ 講演会 (講師・認定NPO法人SHIP):ゲイ男性が陥りやすい負のスパイラル～相談の場面でできること～
- 〈3日目〉10:00～ 講演会 (講師・上村茂仁氏):若者の相談に答え、性トラブル、デートDV予防など、若者へメッセージを追求する産婦人科医。
13:00～ 講演会 (講師・生島 嗣氏):HIVと共に、働く、生きる。

【会場】 かながわ県民センター (神奈川県横浜市神奈川区鶴屋町2-24-2)

【問い合わせ先等】

参加費／自由参加・入場無料 問合せ先／AIDS文化フォーラムin横浜 事務局
〒231-8458 横浜市中区常盤町1-7 横浜YMCA内 TEL 045-662-3721
URL <http://www.yokohamaymca.org/AIDS/> E-mail: abf@yokohamaymca.org

世界性の健康デー in HONOLULU

関西／北東北性教育研修セミナー特別企画 ハワイ・セミナー&交流会

【日程】(予定)

8月29日～30日
2-Day Workshop on Sexual Ethics by Tommi Paalanen
8月31日～9月3日
Site Visit 施設見学・訪問・自由行動
Evening Seminar 現地関係者・WAS役員を講師とする
講演やワークショップ
Social Events 交流会
9月4日
World Sexual Health Day「世界性の健康デー」イン・ハワイ
「性にまつわる嘘を壊せ」

【参加費等】 募集人数:10名程度
参加費:100ドル (ハワイセミナー&交流会)
※一部参加でも同額
現地集合・現地解散

【主催・問い合わせ先等】

主 催／関西性教育研修セミナー実行委員会
北東北性教育研修セミナー実行委員会
後 援／日本性教育協会・日本性科学連合 ほか
問合せ先・申込み先／Email: rc-net@goo.jp 事務局・岡田

▶▶ 9月17日(土) 18日(日) ◀◀

第17回性科学セミナー 第36回日本性科学会学術集会

日時 9月17日(土) 第17回性科学セミナー
9月18日(日) 第36回日本性科学会学術集会

テーマ 地域に根ざした性の健康を考える

内容 17日(土) 未定
18日(日)

特別講演:「性科学から Men's Health をひも解く」(仮)
川崎医科大学泌尿器科学教授 永井 敦

会長講演:「泌尿器科医として性科学へ関与できること」

シンポジウムI:「地域活動での思春期教育再考」

シンポジウムII:「地域に根ざした男性学(アンドロロジー)の診断と治療」
パネルディスカッション 「ピアカウンセラーが語る性教育が男性に与える変化」

会場 長野赤十字病院 基幹災害医療センター
(長野市若里五丁目22番1号)

問い合わせ等

長野赤十字病院泌尿器科 担当:天野俊康
TEL 026-226-4131 (代表) FAX 026-224-1065
E-mail: jsss36@nagano-med.jrc.or.jp